

信濃町の埋蔵文化財

長野県上水内郡信濃町

平成22年度町内遺跡発掘調査報告書

—宮ノ腰遺跡ほか—

2 0 1 1

信濃町教育委員会

例 言

1. 本書は平成22年度に実施した長野県上水内郡信濃町における開発事業に伴う試掘調査及び工事立会の報告書である。
2. 調査は国からの補助金交付を受けて信濃町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆、編集は調査担当者である渡辺哲也がおこなった。編集の補佐を藤田桂子がおこなった。
4. 本調査の遺物、写真等の資料はすべて信濃町教育委員会に保管されている。出土資料の記号は一里塚遺跡が「10IR」、宮ノ腰遺跡が「10MY」である。
5. 調査体制は次のとおりである。

調査主体者	信濃町教育委員会		
事務局	教 育 長	静谷一男	
	教 育 次 長	山縣一郎	
	生涯学習係長	丸山茂幸	
調査担当者	生涯学習係	渡辺哲也	
発掘参加者			
(上ノ原遺跡) 田村勇、徳永門			
(一里塚遺跡) 大沢正志、田村勇			
(宮ノ腰遺跡) 大沢正志、田村勇、藤田桂子			
整理参加者 寺島ちえ子、藤田桂子			
6. 土層の土色観察には『新版 標準土色帖』（小山・竹原1967）を用いた。
7. 調査をおこなうにあたり、次の方々には多大なるご協力をいただいた。記してお礼を申し上げる次第である。
(敬称略、五十音順)
荒井善弘、加藤三男、小林要、小林裕二、齊藤時正、ソフトバンクモバイル(株)、竹内千影、竹内均、中田茂樹、中山徹、中山リウ、吉田幸司、渡邊正純

目 次

I 信濃町の環境と遺跡	1
1. 自然的環境	1
2. 歴史的環境	2
II 調査の内容及び成果	2
1. 川久保遺跡	3
2. 立が鼻遺跡	4
3. 緑ヶ丘遺跡	4
4. 上ノ原遺跡 (2010個人住宅地点)	5
5. 小丸山公園遺跡	6
6. 柳原遺跡	6
7. 一里塚遺跡 (2010個人住宅地点)	7
8. 小古間遺跡	8
9. 向原遺跡	9
10. 宮ノ腰遺跡	9
11. 宮ノ腰遺跡 (2010住宅用車庫地点)	10
12. 高山遺跡	14
写真図版	16

I 信濃町の環境と遺跡

1. 自然的環境

長野県上水内郡信濃町は長野県の北端に位置し、新潟県妙高市と県境を接している。日本海に面した海岸平野の高田平野と、内陸盆地の長野盆地との間にあたり、西には北から妙高山、黒姫山、飯縄山、東には斑尾山がそびえている。これらの火山に挟まれた地域には、標高650～750mの起伏に富んだ高原状の台地が広がっている。

西側の3つの火山では南に位置する飯縄山が最も古く、12から13万年前には活動を終了している。黒姫山は古期の活動が16から11万年前で、新期の活動がおよそ6万年前に活発になり、3万年前頃には活動が衰えている。妙高山は新期の活動が10万年前頃にはじまり、約6000年前に中央火口丘が形成され、現在に至っている。これら3つの火山の活発な活動により、各火山体の東側一帯には火山灰層が広く厚く分布している。中部更新統の火山灰層は20～30m、上部更新統の火山灰層は10m程である。東側の斑尾山は西側の火山よりも古く、およそ30万年

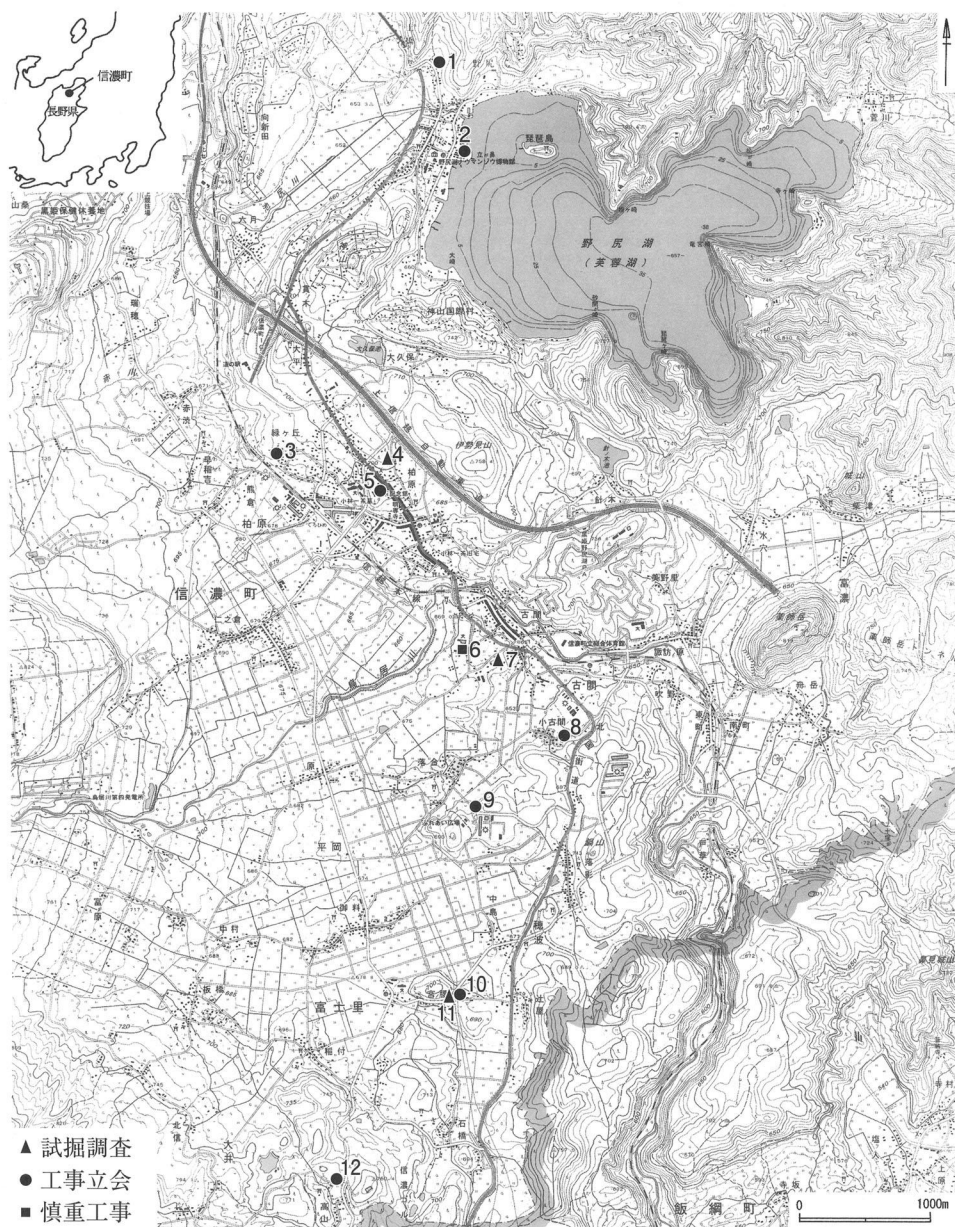


図1 調査地の位置（信濃町役場平成22年9月作成1/25,000地形図を使用）※番号は表1に対応

表1 平成22年度に埋蔵文化財の通知・届出のあった遺跡一覧（補助事業関係のみ）

No.	遺跡名	よみ	原因	調査方法	調査面積	調査期間	出土点数	発掘届日	終了届日
1	川久保	かわくぼ	住宅用倉庫	工事立会	(60㎡)	7/6	0点	6/18	—
2	立が鼻	たてがはな	漁業用倉庫	工事立会	(40㎡)	7/7	0点	7/6	—
3	緑ヶ丘	みどりがおか	個人住宅	工事立会	(552㎡)	4/1	0点	3/19	—
4	上ノ原	うえのはら	個人住宅	試掘調査	1.92㎡	4/1	0点	1/22	4/27
5	小丸山公園	こまるやまこうえん	個人住宅	工事立会	(65㎡)	12/10	0点	11/25	—
6	柳原	やなぎはら	学校校舎	慎重工事	(9,115㎡)	—	—	6/10	—
7	一里塚	いちりづか	個人住宅	試掘調査	4.8㎡	11/30	1点	11/29	23/1/13
8	小古間	こふるま	住宅用倉庫	工事立会	(16㎡)	10/7	0点	9/16	—
9	向原	むかいはら	個人住宅	工事立会	(57㎡)	9/28	0点	7/16	—
10	宮ノ腰	みやのこし	個人住宅	工事立会	(102㎡)	4/15	0点	1/19	—
11	宮ノ腰	みやのこし	住宅用車庫	試掘調査	14.18㎡	8/30～9/1	78点	8/24	10/8
12	高山	たかやま	携帯電話アンテナ	工事立会	(1.4㎡)	12/7	0点	9/14	—

※調査面積の内、()内の数字は調査対象面積

前には活動を終えていたと考えられている。この斑尾山の西麓に広がる緩やかな起伏の地形を、黒姫火山の崩壊によって生じた池尻川岩屑なだれ堆積物がせき止めたことにより、およそ7万年前に野尻湖の原型が誕生した。現在の野尻湖は面積が3.96km²で、水面の標高が654mである。こうした東西の火山に挟まれて低地帯があり、主に後期更新世から完新世の湖沼・河川堆積物からなる丘陵、段丘、低湿地などが人びとの居住域となっている。

野尻湖の水は池尻川から西へ流れ出し、北へ向きを変えて関川に合流し、日本海へ注ぐ。長野市戸隠を水源とする鳥居川は南西方向へ流れ出し、千曲川と合流して、その後信濃川と名前を変えて日本海へ注ぐ。二つの水系の分水嶺は現在の上信越自動車道信濃町インターチェンジ付近と考えられるが、この辺りはなだらかな高原状の地形となっている。分水嶺がなだらかな地形であることは、急峻な山地を越えることなく内陸部へ向かうことができることを意味しており、古くから人や動物の移動経路になっていたものと思われる。

現在人々が暮らす居住域は標高700m前後の地域で、日本海側の気候に属し、冬期は寒冷で多雪、夏期は比較的冷涼で、避暑地としても利用されている。

2. 歴史的環境

信濃町は前述のような地形の特徴により、日本海側と内陸部をつなぐ交通の要所にあたるため、古くから人々の往来が盛んであったことがうかがえる。野尻湖西岸の湖底に広がる立が鼻遺跡はおよそ4万年前の狩猟・解体場（キルサイト）と考えられており、その周辺をナウマンゾウとそれを追う旧石器人が往来したと考えられる。野尻湖周辺には旧石器時代～縄文時代草創期の遺跡が40ヶ所あり、その遺跡のまともりは野尻湖遺跡群と称されている。構成する遺跡はそれぞれ面積が広く、遺物分布の密度も高く、野尻湖の西に連なる丘陵上はとぎれることなく遺跡がつながっているような印象を受ける。近年、上信越自動車道建設や国道18号線の改築工事などにより、長野県埋蔵文化財センターや信濃町教育委員会によって多数の遺跡で広範囲に渡って発掘調査がおこなわれ、膨大な数の遺物が得られている。それらの遺物からは、各方面から人々が流入してきたことがうかがえる。

古代では東山道支道が通っていたと推定されている。また、江戸時代には北国街道が整備され、加賀金沢藩の参勤交代や、佐渡からの金銀の運搬など、重要な街道として利用されていた。現在も国道18号線、上信越自動車道、JR信越本線が通り、交通の要所であることに変わりはない。また、関川がかつての信濃と越後の国さかいとなっていたため、こうした歴史的な地理的条件も備えた地域でもある。中世の山城が多いことも、交通の要所として争奪戦がおこなわれた地であることを物語っている。

信濃町には現在までに173ヶ所の遺跡が知られている（信濃町教育委員会，2003a）が、時代により遺跡数の変遷にその特徴が見出せる。①旧石器時代の遺跡が集中する。②縄文時代では草創期、早期の遺跡数が多く、前期以降の遺跡数は少なくなる。特に中期が少ない。③弥生時代、古墳時代の遺跡数は少なく、平安時代になると遺跡数が増加する。

II 調査の内容及び成果

埋蔵文化財包蔵地における開発計画に対して埋蔵文化財の保護協議をおこなった結果、平成22年度は12ヶ所の開発行為に対して調査等を実施した（図1、表1）。調査方法の内訳は、試掘調査が3件、工事立会が8件、慎重工事が1件である。原因では個人住宅建設が6件、個人住宅用倉庫建設が2件、個人住宅用車庫建設が1件、

漁業用倉庫建設が1件、携帯電話アンテナ建設が1件、学校校舎建設が1件となっている。昨年に比して件数は同じであった。実際に調査に至った遺跡は3ヶ所であったが、本調査への移行が必要と判断されるものはなかった。なお、平成22年度に土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書の提出がなされ、工事立会が必要とした遺跡がほかに3件あるが、平成23年1月末までに実施していないため、本報告書には記載しなかった。

以下に調査の内容と成果を記述する。

1. 川久保遺跡

A. 概要

所在地 信濃町大字野尻字新町977
原因 住宅用倉庫建設
調査方法 工事立会
調査面積 60㎡(工事面積)
調査日 平成22年7月6日
出土遺物点数 0点

B. 遺跡の環境

川久保遺跡は野尻湖から約200m北西に位置する(図1)。旧国道18号線は江戸時代に整備された北国街道で、遺跡はこの道路の両側に、細長い範囲で広がっている。寺山と呼ばれる山の西側のすそ野にあたり、西に広がる池尻川低地(西たんぼ)へ緩やかに下る斜面に立地している。この周辺の地図が更新されていないために図2では古い地図を用いたが、この図の破線部の国道18号線(野尻バイパス)は平成15年(2003)に開通している。

川久保遺跡は古くからその存在が知られ、縄文土器や土師器が採集されていて、信濃史料の遺跡の地名表に掲載されている(信濃史料刊行会, 1956)。

この遺跡の隣接地で野尻バイパス建設に先立って試掘調査がおこなわれた結果、この路線上まで遺跡が広がっていることが確認され、長野県埋蔵文化財センター(以下、県埋文センターと略す)によって平成11年~12年(1999~2000)に6,500㎡にわたって発掘調査が実施された(長野県埋蔵文化財センター, 2004a)。縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺物が出土したが、特に信濃町で出土例が少ない古墳時代の遺物がまとまって出土したことが特徴とされている。なお、この発掘調査によって川久保遺跡が野尻バイパスの建設地まで広がることが確認されたが、信濃町の遺跡地図(信濃町教育委員会, 2003a)には反映されなかったため、遺跡の範囲は調査以前のままとされている。ほかに平成13、14年に下水道工事に先立って試掘調査が実施され、少量の遺物が得られている(信濃町教育委員会, 2003b)。また、昨年も近隣で個人住宅用倉庫建設に伴い、工事立会がおこなわれている(信濃町教育委員会, 2010)。

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡内で個人住宅用倉庫の建設が計画された(図2)。計画では既存の倉庫を撤去した後に、ほぼ同位置に建設するというもので、既存の建物の基礎工事及びその撤去によって大きく改変され、遺跡が破壊されている可能性が高いと判断されたため、対応は工事立会とした。

基礎工事のために小型のバックホウで深さ約40cmを掘削したところで地層を確認したところ、黒色土系の土に黄褐色土が混入しており、攪乱を受けている状況が観察された。遺物包含層が残されておらず、遺構、遺物も確認できなかったことから、遺跡に大きな影響はないと判断し、調査を終了した。

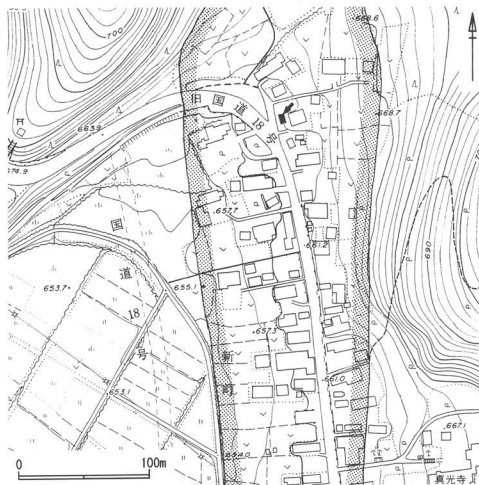


図2 川久保遺跡の範囲と調査地の位置



川久保遺跡 工事立会

2. 立が鼻遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字野尻字海端258-5
原因	漁業用倉庫建設
調査方法	工事立会
調査面積	40㎡（工事面積）
調査日	平成22年7月7日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

野尻湖西岸に立が鼻と呼ばれる岬があり、その岬の南側の、入江部分の湖底が遺跡の中心となっている。昭和37年（1962）から野尻湖発掘調査団によって継続的な発掘調査が実施されており、最近では平成22年（2010）3月に第18次の発掘調査が実施されている。ナウマンゾウなどの大形哺乳動物化石と、石器や骨器などの遺物が共伴することから、およそ4万年前の狩猟・解体場（キルサイト）と推定されている遺跡である。

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡範囲の北端付近で漁業用倉庫の建設が計画された（図3）。計画では既存の倉庫を撤去した後に、ほぼ同位置に同規模の倉庫を建設するというもので、既存の建物の基礎工事及びその撤去によって大きく改変され、遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、対応は工事立会とした。

基礎工事のために小型のバックホウによって掘削した深さはわずか15cm程度であり、その範囲は過去の工事によってすでに改変されていることを確認した。遺構、遺物の確認もできなかったことから、遺跡には大きな影響はないと判断し、調査を終了した。

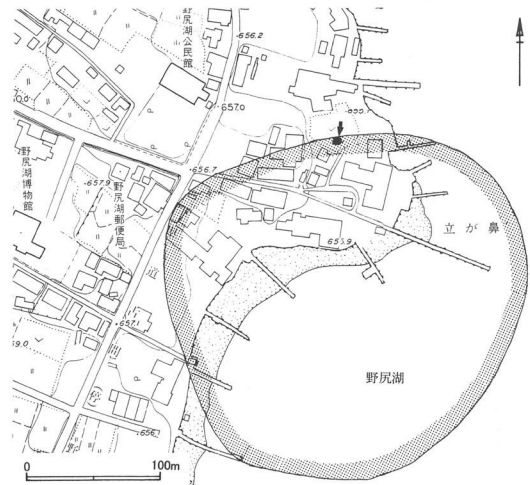


図3 立が鼻遺跡の範囲と調査地の位置



立が鼻遺跡 工事立会

3. 緑ヶ丘遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字柏原2321-8
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	552㎡（工事面積）
調査日	平成22年4月1日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

緑ヶ丘遺跡は上ノ原遺跡の広がる丘陵の頂部から南西方向へ下った丘陵の末端部にあり、JR黒姫駅の北西に位置する。この遺跡ではこれまでに個人住宅建設に伴う試掘調査が1件、個人住宅用倉庫建設に伴う工事立会が1件実施されている（信濃町教育委員会，2008a）が、いずれも遺構、遺物は確認できておらず、遺跡の詳細は不明である。

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された（図4）。建設予定地はさら地になっていたが、かつて住宅があった場所であり、その住宅の位置と今回の建設予定地が概ね重なるということから、過去の建物の基礎工事及びその撤去によって大きく改変され、遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、対応は工事立会とした。

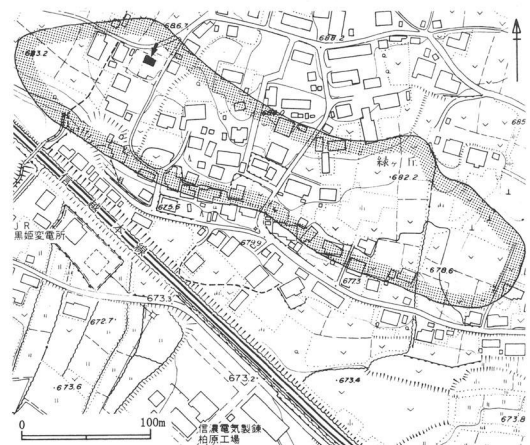


図4 緑ヶ丘遺跡の範囲と調査地の位置

基礎工事のために小型のバックホウによって約40～50cm掘り下げたところで土層の状況を確認したところ、建設予定範囲の概ね半分は攪乱を受けていたが、もう半分には自然に堆積した地層が残されていた。10cm程の表土の下位に約15cmの暗褐色土、約7cmの暗黄褐色土、黄褐色土の順に堆積を確認した。これらの地層からは遺構、遺物が出土する可能性があったため、その確認に努めたが、検出できなかったことから、調査を終了した。

4. 上ノ原遺跡 (2010個人住宅地点)

A. 概要

所在地 信濃町大字柏原字上ノ原244-9
 原因 個人住宅建設
 調査方法 試掘調査
 調査面積 1.92㎡
 調査日 平成22年4月1日
 出土遺物点数 0点

B. 遺跡の環境

上ノ原遺跡は貫ノ木遺跡と東裏遺跡に挟まれた丘陵上に位置する。遺跡は面積が広く、過去に多数の発掘調査が実施されてきた。主な調査は1990年の開墾に伴う発掘調査(中村, 1992a, 1992b, 信濃町教育委員会, 2008b)、1993年の町道改良に伴う発掘調査(信濃町教育委員会, 2008c)、1994～1995年の上信越自動車道建設に伴う発掘調査(長野県埋蔵文化財センター, 2000a, 2000b)、1995年の店舗兼住宅建設に伴う発掘調査(上ノ原遺跡第4次調査)、個人住宅建設に伴う発掘調査(信濃町教育委員会, 1996)、1995～1996年の県道改良に伴う発掘調査(信濃町教育委員会, 2008d)、1996～1997年の町道改良に伴う発掘調査(信濃町教育委員会, 1998)、1997年のガスパイプライン建設に伴う発掘調査(信濃町教育委員会, 2007b)、2006年の研究所建設に伴う試掘調査(信濃町教育委員会, 2007a)などがあり、主に旧石器時代の遺物が多数得られている。

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された(図5)。建設予定地は平坦に整地されていたが、過去に建物が建設された記録がないため、遺跡が残されているか否か不明であったため、試掘調査を実施することにした。周辺では県道改良に伴う発掘調査で後期旧石器時代後半の石器群が出土していることから、旧石器時代の遺跡の分布が予想された。

基礎工事で掘削する範囲について試掘調査を実施する予定であったが、施工業者内での連絡ミスにより、調査前に建設予定地全体が約40cm程の深さで掘削されてしまったため、予定地の外側で1.2×0.8mの試掘トレンチを2ヶ所(TP-1～2, TPはテストピットの略)設置し(図6)、地表面から手掘りによる発掘を実施した。試掘調査及び重機によって掘削された地点の地層を確認したところ、西側には地表下に黒褐色土の表土があった



緑ヶ丘遺跡 工事立会

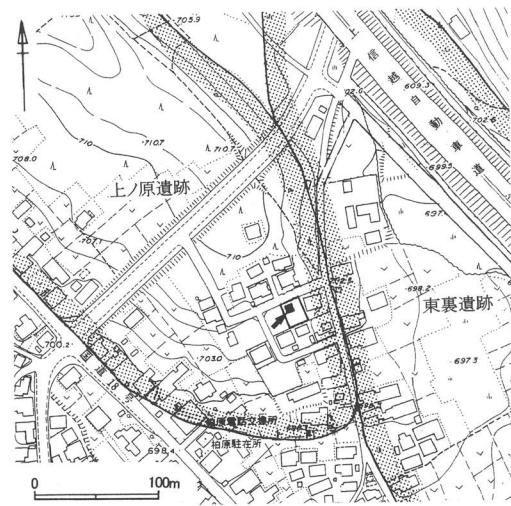


図5 上ノ原遺跡等の範囲と調査地の位置

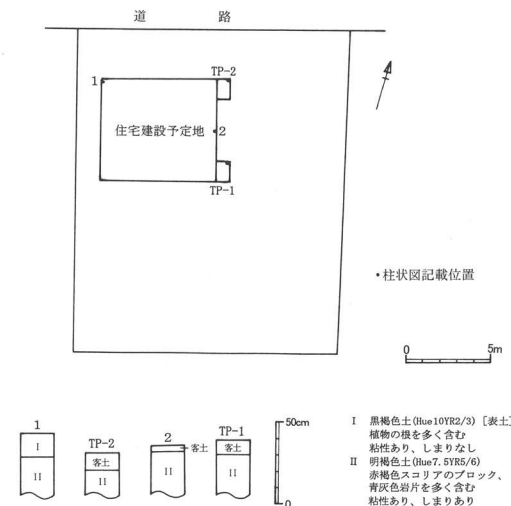


図6 上ノ原遺跡の調査範囲と土層

が、東側は客土がされていた。それらの下位には赤褐色スコリアのブロック、青灰色岩片を含む明褐色土が全体に分布していた。この地層は上部野尻ローム層Ⅰと考えられるが、後期旧石器時代の遺物包含層はそれよりも上位に位置する地層であるため、今回の調査地点では宅地の造成時に遺物包含層は削平されてしまっていることが確認できた。遺構、遺物も確認できなかったことから、ここには遺跡が残されていないと判断し、調査を終了した。

5. 小丸山公園遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字柏原字小丸山2437-20、21
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	65㎡（工事面積）
調査日	平成22年12月10日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

小丸山公園遺跡は伊勢見山の西側に、北西—南東方向にのびる丘陵上に位置する。丘陵頂部の平坦面には国道18号線（旧北国街道）が通るが、この平坦面から南西方向に下る緩斜面に遺跡が広がっている。この斜面には柏原地域の共同墓地があり、その中に、江戸時代の俳人小林一茶が眠る小林家の墓があることから、隣接地に俳諧寺や一茶記念館等が建設され、公園として整備されている。遺跡は柏原町区誌製作の一環でおこなわれた遺跡分布調査によって発見され、表面採集によって旧石器時代の石器、縄文時代早期の土器、土師器などが確認されている（柏原町区誌編纂委員会、1988）。平成11年（1999）に公園整備のために試掘調査が実施されているが、出土遺物は2点のみであった（信濃町教育委員会、2000）。昨年、個人住宅建設に伴う工事立会が2件おこなわれた（信濃町教育委員会、2010）が、これまでに発掘調査は実施されていないため、遺跡の詳細は不明である。

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された（図7）。建設地には以前住宅があり、撤去後は平坦に整地され、その後、畑として利用されていた。過去の建物の基礎工事及びその撤去によって大きく改変され、建設予定地には遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、対応は工事立会とした。

基礎工事で掘削する外周部分を小型のバックホウによって掘り下げたところで土層の確認をおこなった。地表下にはしまりのない暗褐色土が分布し、その下には暗褐色土と黄褐色土が混在する層があった。さらに下には黄褐色土が分布していたが、この黄褐色土には暗褐色土がシミ状に入り、小礫やコンクリート片などが含まれていたため、攪乱を受けていることがわかった。北側に黄褐色土の下にしまりのある黒色土が分布しているのを確認した。これは耕作土と考えられ、遺物を含んでいる可能性があったが、分布範囲は狭く、掘削する厚さは10cm程度であることから、遺跡に与える影響は少ないものと判断した。一部を除いて広く攪乱を受けていることが確認でき、遺構、遺物も確認できなかったことから、遺跡に大きな影響がないと判断し、調査を終了した。

6. 柳原遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字古間491
原因	学校校舎建設
調査方法	慎重工事
調査面積	9,115㎡（工事面積）

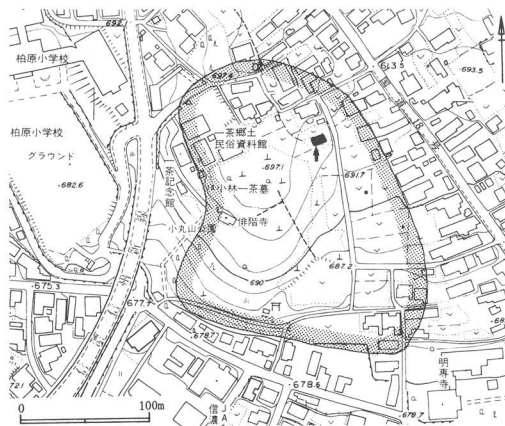


図7 小丸山公園遺跡の範囲と調査地の位置



小丸山公園遺跡 工事立会

B. 遺跡の環境

柳原遺跡は旧北国街道古間宿を東に望む段丘上の高台に位置する。西側には一段低い面に水田が広がり、段丘面と水田との比高は約80mである(図8)。信濃町に5校ある小学校を統合し、現在の信濃中学校の敷地内に新たな校舎を建設する方針が出されたため、信濃町教育委員会では計画の初期の段階で遺跡の状況を確認するための試掘調査を平成18年(2006)に実施した(信濃町教育委員会, 2007a)。その結果、既存の中学校を建設した当時(昭和43~45年)に傾斜地を平坦にするため、地形的に高い西側を削平し、低い東側へ埋め立てて造成したことが判明し、埋め立てられたグラウンドの東側3分の1程度には遺物包含層が残されていることを確認した。

C. 調査に至る経緯と結果

今回の建設予定地は既存の中学校校舎及びテニスコートの位置に校舎棟と体育館を建設するというもので、既存の建物等の建設時に大きな改変を受け、遺跡はすでに破壊されてしまい、残されていないと考えられる地域である。よって、事前の発掘調査は必要ないと思われ、対応は慎重工事とした。なお、試掘調査で遺物包含層が残されていることが確認された地域は現状と同様にグラウンドとして利用されるため、遺跡は保護されている。

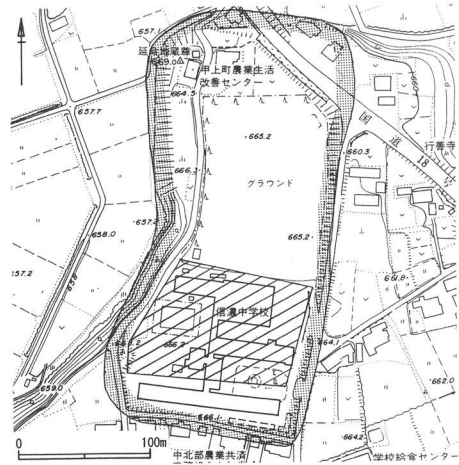


図8 柳原遺跡の範囲と調査地の位置

7. 一里塚遺跡(2010個人住宅地点)

A. 概要

所在地 信濃町大字古間字一里塚966-8、5
 原因 個人住宅建設
 調査方法 試掘調査
 調査面積 4.8㎡
 調査日 平成22年11月30日
 出土遺物点数 1点

B. 遺跡の環境

一里塚遺跡は鳥居川の南の台地上に位置する。近くには北国街道の古間一里塚跡がある。一里塚遺跡内では近年いくつかの個人住宅建設に伴う調査が実施されている。1995年(信濃町教育委員会, 1996)、2001年(信濃町教育委員会, 2002)、2006年(信濃町教育委員会, 2007a)に小規模な調査がおこなわれ、古代、中世の遺物が出土している。遺構は検出されていない。また、2007年には個人住

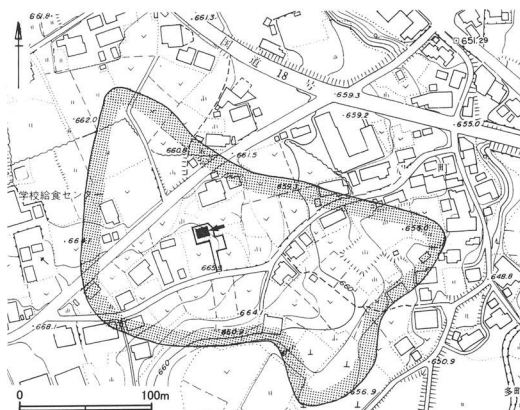
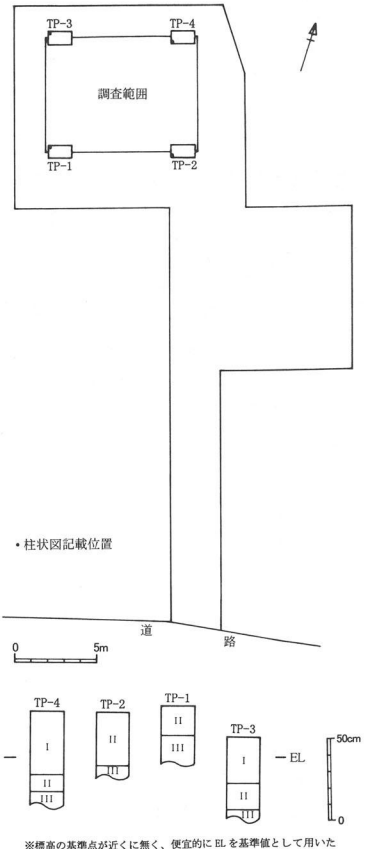


図9 一里塚遺跡の範囲と調査地の位置



※標高の基準点が近くに無く、便宜的にELを基準値として用いた

I 黒褐色土(Hue10R2/2) [カクラン土] 粗褐色土(赤土)、灰を含む 粘性なし、しまりなし	III 褐色土(Hue7.5YR4/4) 径<5cmの円礫を含む 青灰色シルトをはさむ 粘性少しあり、しまりあり
II 黒褐色土(Hue7.5YR3/2) [カクラン土] ビニール、ガラス、礫が混入 粘性なし、しまりなし	

図10 一里塚遺跡の調査範囲と土層

宅建設に伴う工事立会がおこなわれている（信濃町教育委員会，2008a）。

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された（図9）。2006年に試掘調査を実施した地点の西側に隣接した場所である。畑地であったため、これまでに大きな改変を受けていないものと考えられたことから、事前調査が必要と判断し、試掘調査をおこなって遺跡の状況を把握することにした。

住宅の基礎工事実施予定地に1.5×0.8mの試掘トレンチを4ヶ所（TP-1～4）設置し（図10）、工事で掘削する予定の深さまでを、地表面から手掘りによって発掘した。土層の柱状図からもわかるように、すべてのトレンチで地表下に攪乱を受けた地層を確認した。ゴミを含んでおり、ほかから搬入されたものと考えられる。その下位には褐色土（Ⅲ層）があり、これは自然に堆積した地層である。この層は青灰色シルトを含んでいるため、この層が堆積した時期には陸化していなかった可能性があり、この層準には遺跡が存在しない可能性が高い。つまり、ここは攪乱を受けた層と陸化以前の古い層のみが分布し、遺物包含層は残されていない地域であることが確認できたため、本調査は必要ないと判断した。なお、珠洲焼の破片が1点のみⅡ層から出土した。出土状況から周辺地域からの混入と考えられる。甕の一部で、珠洲焼がこの地方に流通した室町時代の所産と考えられる。



一里塚遺跡 調査の様子（東から）

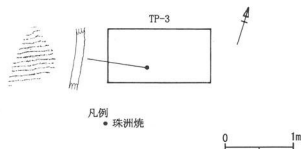


図11 一里塚遺跡の遺物の分布

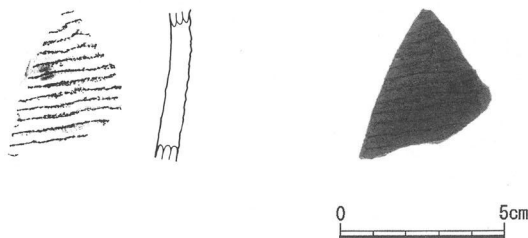


図12 一里塚遺跡出土の珠洲焼片（実測図と写真）

表2 一里塚遺跡 珠洲焼観察表

遺物番号	器種	部位	出土層準	色調		器壁厚さ(mm)	製作痕跡
				外面	内面		
1	甕	胴部	Ⅱ	灰	灰	7	外面に平行叩き目

8. 小古間遺跡

A. 概要

所在地 信濃町大字古間1303-1
 原因 住宅用倉庫建設
 調査方法 工事立会
 調査面積 16㎡（工事面積）
 調査日 平成22年10月7日
 出土遺物点数 0点

B. 遺跡の環境

小古間遺跡は小古間の集落の、北東側の台地上に位置する。平安時代の遺跡となっている（信濃町教育委員会，2003a）が、公道整備に伴う工事立会（信濃町教育委員会，2008a）が実施されているのみで、これまでに発掘調査は行われていないことから、遺跡の詳細は不明である。

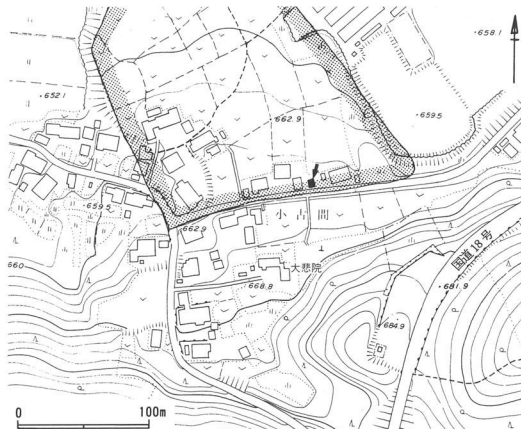
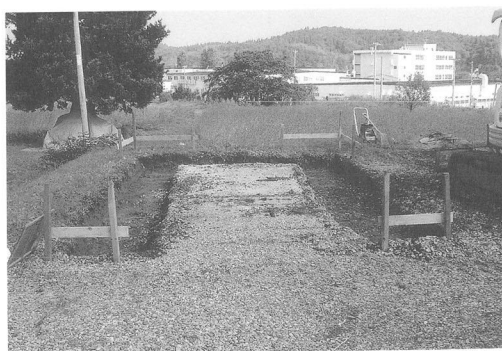


図13 小古間遺跡の範囲と調査地の位置

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡内で個人住宅用倉庫の建設が計画された（図13）。建設予定地は盛り土が施されたところに少し前まで簡易的なパイプ車庫が設置されていた場所である。盛り土は80cm程度施されているものと思われ、基礎工事で掘削する範囲は盛り土中に概ね収まると考えられたため、対応は工事立会とした。

基礎工事のために小型のバックホウによって掘削した深さは約30cmであった。地層を確認したところ、北側は全て黄褐色土の盛り土であった。しかし、南側は上半分が盛り土であるが、下半分はしまりのある自然に堆積した地層が残されていることが確認できた。この層には赤褐色スコリアや青灰色岩片が含まれており、上部野尻ローム層Ⅰに対比できる層と考えられる。この層は後期旧石器時代の遺物包含層よりも古い層であり、この地点には遺物包含層が残されていないことが確認できたため、調査を終了した。



小古間遺跡 工事立会

9. 向原遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字平岡字向原207-2
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	57㎡（工事面積）
調査日	平成22年9月28日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

向原遺跡は鍋山から西側へ張り出すように続く、起伏のある丘陵上に位置する。縄文時代と平安時代の遺跡とされ（信濃町教育委員会、2003a）、過去には介護予防施設建設に伴う工事立会が実施された（信濃町教育委員会、2003b）が、本格的な発掘調査はおこなわれていないことから、遺跡の詳細は不明である。

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された（図14）。建設予定地はもとは水田で、基盤整備により平坦に整地されており、その際に大きな改変を受けたものと考えられたため、対応は工事立会とした。

基礎工事のために小型のバックホウによって深さ約45cmを掘削したところで地層を確認したところ、工事範囲の多くは黄灰色粘土の上に客土された暗褐色土が耕作土として入れられていることがわかった。縄文時代と平安時代の遺物包含層は黒色土であるが、それがほとんど残されておらず、また、遺構、遺物も確認できなかったことから、この地点には遺跡が残されていない可能性が高いと判断し、調査を終了した。



図14 向原遺跡の範囲と調査地の位置



向原遺跡 工事立会

10. 宮ノ腰遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字穂波字南原326-1
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会

調査面積 102㎡（工事面積）
 調査日 平成22年4月15日
 出土遺物点数 0点

B. 遺跡の環境

宮ノ腰遺跡は日の出山の南東側の丘陵上に広がる。この遺跡内では平成9年（1997）に宅地造成が計画され、試掘調査が実施されている（信濃町教育委員会，1998）。この調査で古代と中世の遺物が多数出土したが、開発計画自体は中断となったため、本調査は実施されておらず、遺跡の詳しい状況は明らかにされていない。

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された（図15）。計画は既存の建物を撤去した後、ほぼ同じ位置に同規模の住宅を建設するというもので、既存の建物の基礎工事及びその撤去によって大きく改変され、遺跡が破壊されている可能性が高いと判断されたため、対応は工事立会とした。

基礎工事のために小型のバックホウで掘削後に地層を確認したところ、地表下には全体に黄褐色ローム層が分布しているのを確認した。古代、中世の遺物包含層である黒色土はすでに削平されていることから、この地点には遺跡が残されていない可能性が高いと判断し、調査を終了した。

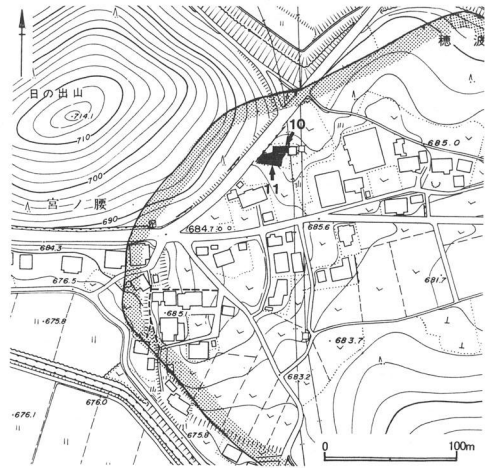


図15 宮ノ腰遺跡の範囲と調査地の位置

11. 宮ノ腰遺跡（2010住宅用車庫地点）

A. 概要

所在地 信濃町大字穂波字南原327-10
 原因 住宅用車庫建設
 調査方法 試掘調査
 調査面積 14.18㎡
 調査期間 平成22年8月30日～9月1日
 出土遺物点数 78点

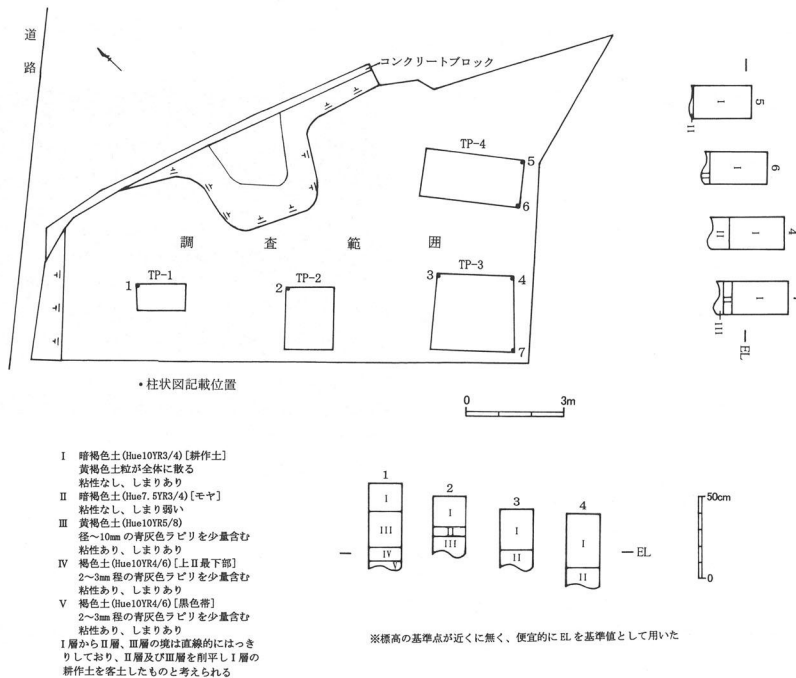


図16 宮ノ腰遺跡（2010住宅用車庫地点）の調査範囲と土層

B. 調査に至る経緯

上記の10.宮ノ腰遺跡の住宅建設に付随して、隣接地に車庫の建設が計画された(図15)。建設予定地の現状は畑地で、本来の地形をとどめていると考えられたため、試掘調査を実施して、遺跡の状況を把握することとした。

C. 調査の方法

車庫の建設予定地は住宅建設地よりも1m程度高い畑地であったため、住宅建設地と同じ高さまで土を取り除き、平坦に造成した後に車庫をつくるという計画であった。造成する範囲が調査対象範囲となり、その面積は110㎡である。調査対象範囲内に3～4mの間隔を置いて、1.5×0.8mの試掘トレンチを4ヶ所(TP-1～4)設置(図16)し、手掘りによって掘り下げた。TP-2～4から遺物が出土したため、それぞれ拡張した。TP-2は2.85㎡、TP-3は5.63㎡、TP-4は4.5㎡に広げた。遺物の分布はさらに広がるのが予想されたが、遺物は小片のみで、遺構が伴わないことから、この遺物の分布は耕作作業によって拡散した遺物の分布に過ぎず、この地点に良好な状態で遺跡が残されている可能性は低いと判断されたため、これ以上の拡張はおこなわず、本調査の必要はないと判断した。

D. 調査の結果

a. 層序

地表下には全体にI層の暗褐色土が分布していた。I層は20～35cmの厚さがあるが、下位の層準との境界が直線的であり、自然に堆積したものとは考え難い。II層またはIII層を平坦に削平したのち、耕作土としてI層を客土したものと考えられる。II層は暗褐色土で、野尻湖周辺では「モヤ」と呼ばれる漸移層である。III～V層はそれぞれ層厚が薄いものの、野尻湖周辺で見られる層序(野尻湖人類考古グループ, 1994)が残されていることを確認した。遺物は礫1点を除いて耕作土のI層及び攪乱を受けた層から出土しているため、耕作の影響を大きく受けているものと考えられる。

b. 遺物の分布

遺物はI層が厚く残っている地域に多く分布していることがわかる。西側のTP-1、TP-2には遺物が少なく、TP-3、TP-4に多くが分布する。これまでに述べたように耕作の影響を受けた遺物の分布であり、分布状況から遺跡の性格を論じることはできない。

c. 出土遺物

遺物は78点出土した。内訳は土器片69点、石器6点、礫3点である。石器には石鎌2点が含まれている。土器片の内訳は縄文土器片が38点、土師器片27点、須恵器片2点、灰釉陶器片2点である。これらの土器片はいずれも小片のため図化が困難で、図化できたのは1点のみである。1は横位の沈線の下位に、櫛歯状工具による刺突が施されている。ほかに7点の土器片に沈線が施されている。これらは縄文土器早期の沈線文系土器と考えられ、町内では上山桑遺跡(信濃町教育委員会, 2004a)と東裏遺跡の東裏団地地点・町道柴山線地点(信濃町教育委員会, 2004b)に類例が見られる。ほかに口唇部に縄文RLが施文された土器片が1点ある(遺物番号28)。石器は6点出土し、2点が石鎌、4点が剥片で、いずれ

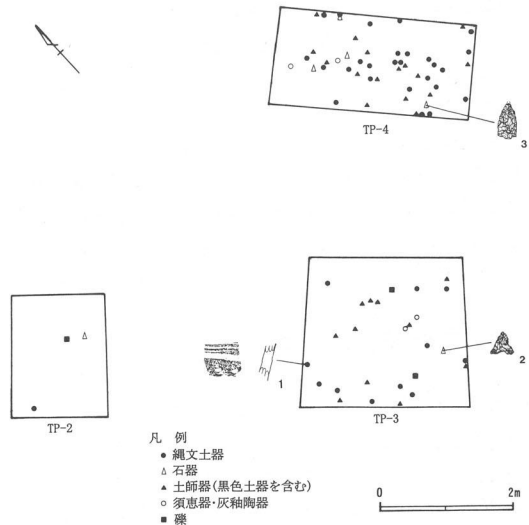


図17 宮ノ腰遺跡(2010住宅用車庫地点)の遺物の分布



宮ノ腰遺跡(2010住宅用車庫地点)調査の様子(東から)



宮ノ腰遺跡(2010住宅用車庫地点)TP-4の遺物の出土状況(南西から)

も出土した縄文土器と同時期のものと考えておきたい。石鏃は凹基無茎鏃と平基有茎鏃である。古代の土器は土師器片27点（黒色土器8点を含む）、須恵器2点、灰釉陶器2点が出土した。いずれも小片のために、器形が復元できないため、時期の特定は困難であるが、須恵器と灰釉陶器が混在していることから、1時期のものではなく、古代の中でも複数の時期の遺跡が存在していたと考えられる。概ね9世紀から11世紀の間にいくつかの時期の住居がこの周辺にあったものと推測できる。礫が1点のみⅢ層から出土した。安山岩製の凹円礫で、自然状態で地層中に含まれることは考え難い。これが遺物とすれば、出土した地層から旧石器時代に属するものと思われるが、石器等の遺物の共伴がないため、旧石器時代の遺跡が分布する可能性のみを指摘しておきたい。

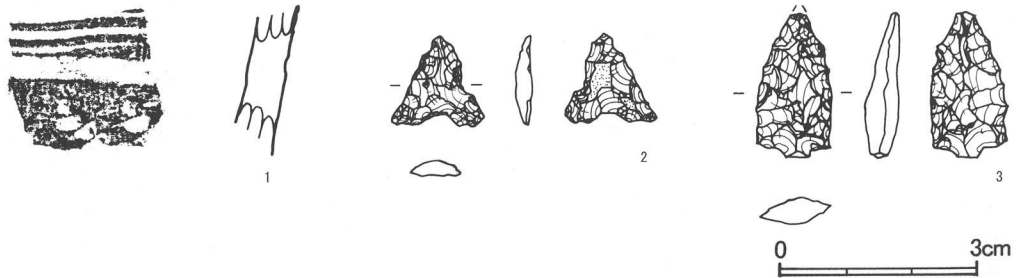


図18 宮ノ腰遺跡（2010住宅用車庫地点）の遺物（縄文土器・石鏃）

表3 宮ノ腰遺跡（2010住宅用車庫地点）縄文土器観察表

図番号	トレンチ	遺物番号	部位	出土層準	文様	調整	砂粒の量	含有物	織維痕	色調		器壁厚さ(mm)	備考
										外面	内面		
TP-2	1	胴部	I				やや多	qt ho シロ 7カ 水晶		明赤褐色	赤褐色	7	
TP-3	4	胴部	I			外ナデ 内ナデ	やや多	qt ho bt シロ 水晶		明赤褐色	赤褐色	5	
TP-3	6	胴部	I			外ナデ 内ナデ	やや多	qt ho シロ 7カ 水晶		橙色	明赤褐色	5	
TP-3	8	底部	I			外ナデ	やや多	qt ho シロ 7カ		明赤褐色	明赤褐色	8	
TP-3	10	胴部	I	沈線		内ナデ		qt ho シロ 7カ		橙色	明赤褐色	5	
TP-3	11	胴部	I			外ナデ 内ナデ		qt ho シロ 7カ レキ		橙色	橙色	7	
TP-3	13	口縁部	I			内ナデ	やや多	qt bt シロ 7カ 水晶 レキ		黒色	にぶい橙色	5	
TP-3	16	胴部	I			外ナデ 内ナデ	多	qt ho シロ		明赤褐色	明赤褐色	8	
TP-3	18	胴部	I			外ナデ		qt ho シロ 7カ レキ		橙色	にぶい黄褐色	5	
TP-3	27	胴部	I			内ナデ	やや多	qt ho シロ 7カ 水晶 レキ	○	明褐色	橙色	5	
TP-3	67	胴部	I	沈線		外ナデ 内ナデ		qt ho シロ 7カ	○	灰褐色	灰褐色	5	
1	TP-3	69	胴部	カクシ	沈線、刺突	外ナデ 内ナデ		qt ho シロ 7カ		にぶい赤褐色	にぶい橙色	6	
TP-4	28	口縁部	I	口唇部に縄文		外ナデ 内ナデ		qt ho bt シロ 7カ	○	橙色	にぶい橙色	7	
TP-4	29	胴部	I					qt ho シロ 7カ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3	
TP-4	30	胴部	I			外ナデ		qt ho シロ		橙色	にぶい黄褐色	4	
TP-4	34	胴部	I					qt ho シロ 7カ 水晶 レキ		にぶい橙色	黒色	5	
TP-4	35	胴部	I	沈線			やや多	qt ho シロ 7カ 水晶 レキ	○	にぶい橙色	にぶい橙色	6	
TP-4	41	胴部	I					qt ho シロ 7カ 水晶 レキ		にぶい黄褐色	にぶい橙色	6	
TP-4	44	胴部	I	沈線		内ナデ		qt ho シロ 7カ レキ		にぶい黄褐色	にぶい橙色	5	
TP-4	46	胴部	I	沈線、刺突		内ナデ		qt ho シロ 7カ 水晶 レキ	○	橙色	にぶい赤褐色	6	
TP-4	48	口縁部	I			外ナデ 内ナデ		qt ho シロ 7カ 水晶 レキ		にぶい橙色	にぶい橙色	7	
TP-4	51	胴部	I			内ナデ	やや多	qt ho シロ 7カ 水晶 レキ		にぶい橙色	にぶい橙色	5	
TP-4	55	胴部	I				やや多	qt ho シロ 7カ 水晶 レキ		明赤褐色	橙色	6	赤色塗彩？
TP-4	56	胴部	I			外ナデ	やや多	qt ho シロ 7カ 水晶		にぶい橙色	橙色	7	
TP-4	57	胴部	I			外ナデ 内ナデ		qt ho シロ 7カ		橙色	橙色	6	
TP-4	60	胴部	I	沈線		内ナデ		qt ho シロ 7カ 水晶 レキ		にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	7	
TP-4	61	胴部	I			外ナデ 内ナデ		qt ho シロ 7カ 水晶	○	橙色	灰赤色	7	
TP-4	62	胴部	I	沈線、縄文		内ナデ		ho シロ		にぶい褐色	にぶい橙色	5	
TP-4	63	胴部	I			外ナデ 内ナデ		qt ho シロ 7カ 水晶 レキ		橙色	灰褐色	5	
TP-4	64	胴部	I					qt ho シロ		にぶい赤褐色	明赤褐色	5	
TP-4	65	胴部	I					qt ho シロ 7カ レキ		にぶい橙色	橙色	6	赤色塗彩？
TP-4	70	胴部	I					qt ho シロ 7カ		橙色	橙色	6	
TP-4	72	胴部	I			外ナデ		qt ho シロ 7カ		にぶい赤褐色	明赤褐色	5	
TP-4	73	胴部	I					qt ho シロ 7カ レキ		灰褐色	にぶい赤褐色	4	
TP-4	74	胴部	I					qt ho シロ 7カ		橙色	明褐色	5	
TP-4	75	胴部	I			外ナデ		qt シロ 7カ		明赤褐色	にぶい赤褐色	4	
TP-4	76	胴部	I			外ナデ 内ナデ		qt ho シロ 7カ		にぶい赤褐色	にぶい褐色	7	
TP-4	77	胴部	I					qt ho シロ		橙色	にぶい橙色	5	

qt：石英、ho：角閃石、bt：黒雲母、シロ：白色岩片、7カ：赤色岩片、水晶：2mm以上の結晶、レキ：2mm以上の小礫を表す

表4 宮ノ腰遺跡 (2010住宅用車庫地点) 石器観察表

図番号	トレンチ	遺物番号	遺物名	石材	出土層準	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴
	TP-2	3	剥片	Ch	カクソ	1.4	1.2	0.5	0.97	
2	TP-3	14	石鏃	Ob	I	1.4	1.4	0.3	0.33	凹基無茎鏃。背面は全体に平坦で、一部に自然面を残す。
3	TP-4	32	石鏃	Tu	I	2.1	1.1	0.6	1.05	平基有茎鏃。先端部と基部を欠損する。
	TP-4	45	剥片	Ch	I	1.5	1.2	0.7	0.89	
	TP-4	52	剥片	Tu	I	3.5	2.2	0.5	3.24	
	TP-4	54	剥片	Tu	I	1.3	1.3	0.5	0.44	

表5 宮ノ腰遺跡 (2010住宅用車庫地点) 土師器観察表

トレンチ	遺物番号	部位	出土層準	調整	砂粒の量	含有物	色調		器壁厚さ (mm)	備考
							外面	内面		
TP-3	5	口縁部	I	内ロクロナデ	やや多	qt ho 沝 珩 水晶	にぶい橙色	明赤褐色	6	
TP-3	7	胴部	I	外ナデ 内ハケメ		ho 沝 珩	橙色	にぶい橙色	7	
TP-3	9	胴部	I	外ナデ 内ナデ		qt ho 沝 珩 水晶	橙色	橙色	4	
TP-3	15	胴部	I	外ナデ 内ミガキ		qt ho 沝 珩	橙色	黒色	4	黒色土器
TP-3	17	底部	I	外ナデ 内ナデ	やや多	qt ho 沝 珩 水晶 レキ	橙色	灰黄褐色	7-9	
TP-3	22	胴部	I	外ナデ 内ナデ	やや多	qt ho 沝 珩 水晶 レキ	橙色	橙色	5	
TP-3	23	胴部	I		やや多	qt ho 沝 珩 水晶 レキ	明赤褐色	明赤褐色	5	
TP-3	24	胴部	I		やや多	qt ho 沝 珩 レキ	橙色	褐色	3	
TP-3	25	口縁部	I	外ロクロナデ 内ミガキ		qt ho 沝 珩 水晶	橙色	黒色	4	黒色土器
TP-3	26	胴部	I	外ナデ 内ナデ		qt ho 沝 珩 水晶 レキ	橙色	にぶい橙色	4	
TP-3	68	胴部	I			qt ho 沝 珩 水晶	灰黄褐色	褐色	5	
TP-4	31	胴部	I			qt ho 沝 珩	褐色	明赤褐色	3	
TP-4	33	胴部	I		やや多	qt ho 沝 珩 水晶 レキ	褐色	明赤褐色	4	
TP-4	36	胴部	I	外ナデ 内ミガキ		qt 沝 珩 レキ	褐色	黒色	3	黒色土器
TP-4	37	胴部	I			qt ho 沝 珩	にぶい褐色	褐色	4	
TP-4	38	胴部	I	外ナデ 内ナデ		qt ho bt 沝 珩 水晶 レキ	褐色	にぶい黄褐色	3	
TP-4	39	胴部	I	外ナデ 内ナデ		qt ho 沝 レキ	にぶい褐色	にぶい褐色	3	
TP-4	40	胴部	I	外ナデ 内ナデ		qt ho 沝 珩	明赤褐色	明赤褐色	4	
TP-4	43	胴部	I	外ナデ 内ミガキ		qt ho 沝 水晶	黒色	にぶい橙色	3	黒色土器
TP-4	49	胴部	I	外ナデ 内ロクロナデ	やや多	qt ho 沝 レキ	褐色	褐色	6	
TP-4	50	胴部	I	外ナデ 内ミガキ		qt ho 沝 珩 レキ	にぶい褐色	黒色	3	黒色土器
TP-4	53	胴部	I	外ナデ 内ナデ		qt ho bt 沝 珩	にぶい褐色	褐色	4	
TP-4	58	胴部	I	内ミガキ		qt ho bt 沝 珩	にぶい赤褐色	黒色	3	黒色土器
TP-4	59	胴部	I	内ミガキ		qt ho 沝 珩 レキ	褐色	黒色	4	黒色土器
TP-4	66	底部	I			qt ho 沝 水晶	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	4	黒色土器
TP-4	71	胴部	I	外ナデ 内ナデ		qt ho 沝 珩 水晶	にぶい褐色	にぶい黄褐色	5	
TP-4	78	口縁部	I			qt ho 沝 珩 レキ	褐色	褐色	3	

qt: 石英、ho: 角閃石、bt: 黒雲母、沝: 白色岩片、珩: 赤色岩片、水晶: 2mm以上の結晶、レキ: 2mm以上の小礫を表す

表6 宮ノ腰遺跡 (2010住宅用車庫地点) 須恵器観察表

トレンチ	遺物番号	器種	部位	出土層準	含有物	色調		器壁厚さ (mm)	製作痕跡
						外面	内面		
TP-4	42	杯?	胴部	I	qt ho 沝 珩	灰	灰	5	ロクロナデ
TP-4	47	蓋?	口縁部	I	qt 沝	にぶい黄	灰	6	ナデ

qt: 石英、ho: 角閃石、沝: 白色岩片、珩: 赤色岩片を表す

表7 宮ノ腰遺跡 (2010住宅用車庫地点) 灰釉陶器観察表

トレンチ	遺物番号	器種	部位	出土層準	色調		器壁厚さ (mm)	製作痕跡
					外面	内面		
TP-3	19	皿?	口縁部	I	灰白	灰白	4	ロクロナデ。口縁部から外側は2.2cmの幅、内側は1.5cmの幅で灰釉施釉。
TP-3	20	壺?	頸部	I	灰白	灰白	8-10	ロクロナデ。内、外ともに全面に灰釉施釉。

表8 宮ノ腰遺跡 (2010住宅用車庫地点) 礫属性表

トレンチ	遺物番号	出土層準	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	割れありなし×	割れの割合%	焼けありなし×	平面形 (長短)	平面形 (角丸)
TP-2	2	III	4.7	2.6	1.1	16.42	×		×	長	角
TP-3	12	I	4.3	2.5	1.7	15.04	○	40	○	長	角
TP-3	21	I	2.2	1.4	1.4	5.20	○	60	○	長	角

d. まとめ

縄文時代と古代の遺物を得ることができたが、これらは耕作によって大きく移動していることが考えられ、本来の遺物包含層は確認できなかった。しかし、遺物を含む耕作土は調査地周辺から運ばれたものと考えられ、調査地点を含め、地形的に続いている一帯には、この時代の遺跡が分布しているものと考えられる。周辺には畑地が広がり、古くからの地形をとどめているように思われる。この畑地には遺物包含層及び遺構が残されている可能性があり、今後、こうした地域で発掘調査が実施できれば、さらに詳しい遺跡の情報が得られるものと思われる。

12. 高山遺跡

A. 概要

所在地 信濃町大字大井字北原2538-1
原因 携帯電話アンテナ建設
調査方法 工事立会
調査面積 1.4㎡ (工事面積)
調査日 平成22年12月7日
出土遺物点数 0点

B. 遺跡の環境

高山遺跡は高山の集落の北側に位置し、丘陵頂部付近の比較的平坦な地形上に分布する。平成6～7年(1994～1995)にゴルフ場建設に伴って試掘調査がおこなわれ、縄文時代の陥穴と少量の縄文土器が確認されている(信濃町教育委員会, 2001b, 2008e)。

C. 調査に至る経緯と結果

遺跡内で携帯電話のアンテナ設置工事が計画された(図19)。計画では掘削する面積が1.4㎡で、狭小のために調査は困難と判断されたため、対応は工事立会とした。

建設予定地の現状は荒地で、平坦な地形であった。小型のバックホウによって80cm程度の深さまで掘削したところで土層を確認した。地表下に暗褐色土が20cm程度あり、その下には暗黄褐色土が分布していた。暗褐色土はしまりがなく、暗黄褐色土はしまりが弱くて、角礫、円礫、橙褐色スコリアを含んでいることから、いずれの層も埋め土であると判断した。埋め土の下位に遺跡が残されているか否かは不明であるが、掘削による遺跡への影響がないことが確認できたため、調査を終了した。

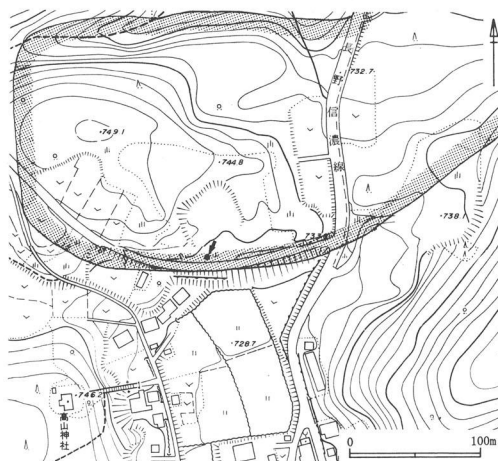


図19 高山遺跡の範囲と調査地の位置



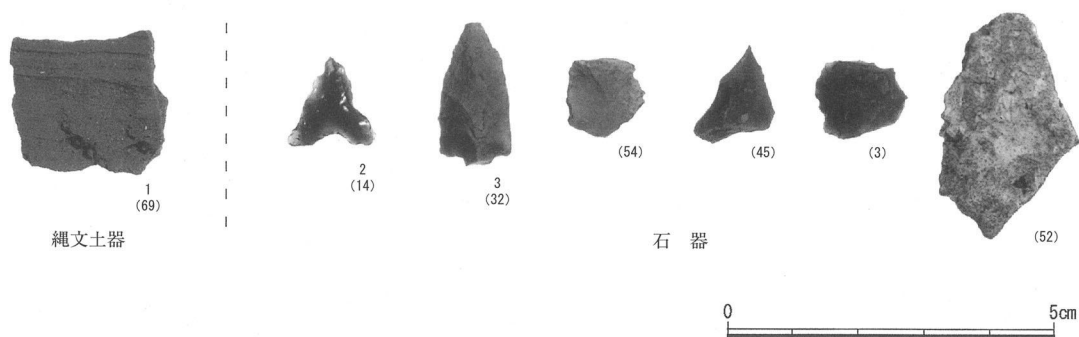
高山遺跡 工事立会

文献

- 柏原町区誌編纂委員会 1988『柏原町区誌』
- 小山正忠・竹原秀雄 1967『新版 標準土色帖』
- 信濃史料刊行会 1956『信濃史料 第1巻上』
- 信濃町教育委員会 1996『上ノ原遺跡(4次)ほか発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 1998『上ノ原遺跡(7次)ほか発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2000『仲町遺跡(個人住宅地点)ほか発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2001a『仲町遺跡・貫ノ木遺跡 2000個人住宅地点発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2001b『市道遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2002『仲町遺跡・一里塚遺跡 2001個人住宅地点発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2003a『信濃町の遺跡分布図』
- 信濃町教育委員会 2003b『平成14年度町内遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2004a『上山桑A遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2004b『東裏遺跡 東裏団地地点・町道柴山線地点発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2007a『平成18年度町内遺跡発掘調査報告書—清明台遺跡ほか—』

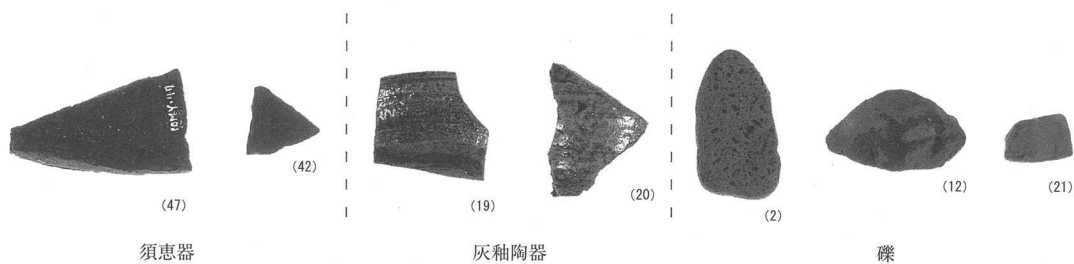
- 信濃町教育委員会 2007b 『上ノ原遺跡・東裏遺跡・裏ノ山遺跡』
信濃町教育委員会 2008a 『平成19年度町内遺跡発掘調査報告書—大道下遺跡ほか—』
信濃町教育委員会 2008b 『上ノ原遺跡（第1次・北部高校分校跡地地点）発掘調査報告書』
信濃町教育委員会 2008c 『上ノ原遺跡（第2次・町道地点）発掘調査報告書』
信濃町教育委員会 2008d 『上ノ原遺跡（第5次・県道地点）発掘調査報告書』
信濃町教育委員会 2008e 『信濃町遺跡調査の概要』
信濃町教育委員会 2010 『平成21年度町内遺跡発掘調査報告書』
中村由克 1992a 「速報 長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅰ）」『考古学ジャーナル No.342』
中村由克 1992b 「速報 長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅱ）」『考古学ジャーナル No.344』
長野県埋蔵文化財センター 2000a 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15—信濃町内その1—裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡』
長野県埋蔵文化財センター 2000b 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16—信濃町内その2—縄文時代～近世編』
長野県埋蔵文化財センター 2004a 『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書4 信濃町内その4 川久保遺跡』
長野県埋蔵文化財センター 2004b 『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書3 信濃町内その3 仲町遺跡』
野尻湖人類考古グループ 1994 「野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化」『野尻湖博物館研究報告第2号』

写真図版



縄文土器

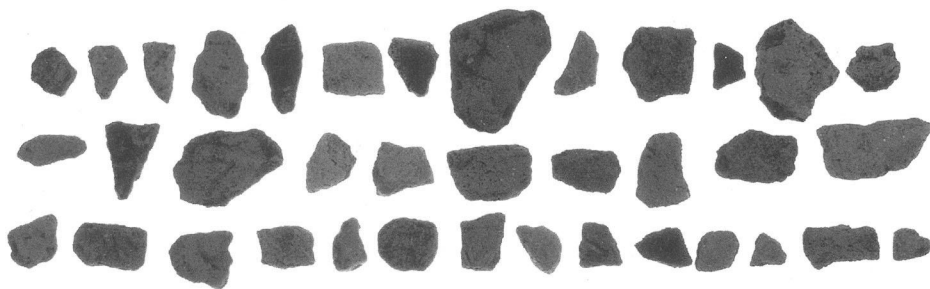
石器



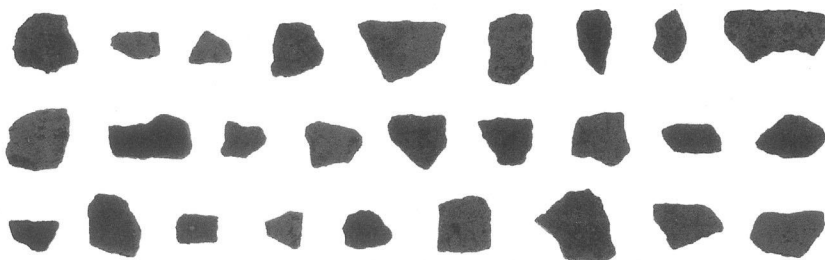
須恵器

灰釉陶器

礫



縄文土器



土師器（黒色土器を含む）



数字は図番号に対応する。() 内の数字は遺物番号を示す。

宮ノ腰遺跡（2010住宅用車庫地点）の出土遺物

報告書抄録

書名	へいぜい ねん ど ちやうない い せきはつ ぐつ ちやう き ほうこく しょ 平成22年度町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	宮ノ腰遺跡ほか							
シリーズ名	信濃町の埋蔵文化財							
シリーズ番号								
編著者名	渡辺哲也							
編集機関	信濃町教育委員会							
所在地	〒389-1305 長野県上水内郡信濃町柏原428-2 TEL: 026-255-5923							
発行年月日	2011年(平成23年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえの 上ノ原	ながの けんかみ の ちぐん しな の まち 長野県上水内郡信濃町 おおあざかしわばらあざうえの ほん 大字 柏原 上ノ原244-9	20583	65	36度 48分 42秒	138度 12分 8秒	20100401	1.92 (工事面積52)	試掘調査 (個人住宅)
いちりづか 一里塚	ながの けんかみ の ちぐん しな の まち 長野県上水内郡信濃町 おおあざふるまあざいちりづか 大字 古間字 一里塚966-8、5	20583	86	36度 47分 50秒	138度 12分 40秒	20101130	4.8 (工事面積62)	試掘調査 (個人住宅)
みやのこし 宮ノ腰	ながの けんかみ の ちぐん しな の まち 長野県上水内郡信濃町 おおあざほ なみあざなみはら 大字 穂波字 南原327-10	20583	152	36度 46分 28秒	138度 12分 27秒	20100830 ～ 20100901	14.18 (工事面積110)	試掘調査 (住宅用車庫)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上ノ原	散布地	旧石器時代 縄文時代		出土品なし				
一里塚	散布地	中世		珠洲焼 1点				
宮ノ腰	散布地	縄文時代 平安時代		縄文土器・石鏃・ 土師器など 78点				

平成22年度町内遺跡発掘調査報告書

—宮ノ腰遺跡ほか—

発行 平成23年(2011)3月31日
 発行者 信濃町教育委員会
 〒389-1305
 長野県上水内郡信濃町大字柏原428-2
 TEL 026-255-5923
 印刷 信毎書籍印刷株式会社
 〒381-0037
 長野県長野市西和田1-30-3
 TEL 026-243-2105

2 0 1 1

Shinano-machi Board of Education,
Kamiminochi-gun, Nagano, 389-1305 Japan